B—14 和服地の保温性について

目白学園女短大　田京てる子

目的　和服は従来季節により、衣がえをして環境の季候と身体的条件とのバランスをとって来た。特に和服地は、ほとんどが弦手なので冬には裏をつけたり、綿を入れたりして暖房のない時代を凌いで来たのは周知の通りである。然し和服地の保温性についての基礎データーがなく、又単衣（ひとえ）と袷（あわせ）との相違も不明なのでそれらについて研究を行った。

方法　試料として表地に綿3種、絹7種、毛3種、化繊3種、交織1種、裏地には綿、絹、化繊の各1種づゝ選び用いた。実験は単衣として一枚の場合と袷として表地と裏地を重ねた場合について数種行ない検討した。保温性試験材は、恒温法により保温率を測定算出した。又保温に関係ある通気度を、エアパーミアメーターにより測定し、其の他2、3の性能についても測定検討した。

結果　一枚の場合の保温率は　絹の紬が最も高く　次は綿、毛の順である。然し絹のちりめんは　低い方であった。含気率の高いのは、絹の紬と綿の布地であるが、他のものとの差は少くほとんど皆大差なかった。二枚の場合の保温率は、重ねた裏地の3種類により区別して比較検討した。単独にて保温率の高い綿の裏地を重ねた場合はいづれも保温率が高くなるのは当然であるが、裏地を重ねたことによって各布の保温率に多少の差が見られたが、それは布自体の性能からくる影響ではないかと考えられる。